フレイジオロジー研究会　サーキュラーNo. 3

2011 年 3 月 7 日

発行責任　会代表　八木克正

フレイジオロジー研究会第３回例会参加のお礼

３月５日，６日の２日にわたって開催しました研究会第３回例会で研究発表，シンポジウム講演，司会，運営にあたっていただきました先生方，またご参加いただいた方々に篤く御礼もうしあげます。今回の例会には両日ともそれぞれ 40 名余の方に参加していただきました。

例会開催には，半年前からの準備と，発表者や司会者とのいろいろな調整が必要です。発表者，講演者はそれぞれにこれまでの研究成果をまとめ，ふだんにない緊張感をもって臨むことになります。それぞれに今回のために全力で準備して臨んでいただきました。それを反映した内容豊かな会になったと思っています。

私自身もたくさんのことを学ぶことができました。学ぶことが多すぎで消化不良気味のところもあるでしょうが，取捨選択して参考にできるところを見出していただければ幸いです。

フレイジオロジーは，語彙はもちろん，コロケーション，成句，イディオム，ことわざ，あるいはこれらと文化との関わり，また，これらが果たす言語内での役割を研究する分野と理解しています。この考え方は，言語教育にも深く関わりがあります。

最近『英語教育』誌でも取り上げられましたが，EU の「参照枠」(Common European Framework of Reference for Language: learning, teaching, assessment)と言われる，言語の学習，教育，評価に関わる基準が公表されています（特に p.24 以降の３表）。（http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/source/Framework_EN.pdf 参照）
ここでは，最初の段階(A1)でも「語彙とフレーズの習得」が基礎と考えられ，最高段階(C2)でも「慣用表現と口語表現」の重要性が述べられています。Joanna がポーランドでの communication-oriented な英語教育の話しをしましたが，基本はこの「参照枠」にあるように思われます。また，ヨーロッパ諸国でフレイジオロジーの研究が盛んになっている理由と，この参照枠とも無関係であるとは思えません。

さて，第４回例会（2011 年９月２５日，関学梅田キャンパスを予定）の準備を始めなければなりません。発表の応募（発表者 4 名）を事務局にご連絡下さい。『英語教育』誌などの案内掲載の都合がありますので，とりあえずの発表申し込みの締め切りを 7 月 10 日とさせていただき，運営委員会での審査を経て，発表者の決定を行います。

以上